

漢語と和語

漢(もろこし)語はの字音〔中国音〕には、呉音・漢音・唐宋音と異なった時期に日本に伝わった字音があります。さらに、室町時代の頃から混種語〔重箱読み・湯桶読み〕が用いられ始め、実に複雑な音の形態として今日、「日本語」として引き継いできています。

和語は「やまとことば」と呼ばれ、古来日本で用いられていたことばです。現在もこのことばは平常の暮らしのなかで多く用いられています。

大蔵流狂言に「舟船」というのがあります。

今週、6月10日(土) / 13時 ~ 「国立能楽堂普及公演」 正 4,800円 / 脇 3,100円 / 中 2,600円 / 学生脇 2,200円 / 学生中 1,800円 解説 田中貴子

大蔵流 狂言「舟船」 日下部禮蔵 金春流 能「鶴」 櫻間金記 国立能楽堂 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-18-1 国立劇場チケットセンター(10時 ~ 17時) 0570-07-9900(4/1 ~) 03-3230-3000(PHS) という演目にありますので、是非、お出かけになってみてはと思います。 [狂言関係の書籍](#)

舟船(ふねふな)

シテ 太郎冠者 狂言上下・着付 縞熨斗目

アド 主 長上下・着付 段熨斗目・小サワ

主 これはこのあたりに住まい致す者でござる。この間は久しゅういずかたへも出ねば、心が屈して悪しゅうござるによって、今日はどれへぞ、遊山に参ろうと存ずる。まず太郎冠者を呼び出だいで談合致そう。ヤイヤイ太郎冠者あるかやい。太郎冠者ハアア。主 いたか。太郎冠者お前におりまする。主 念無う早かった。汝を呼び出だすは別なることでもない。この間は久しゅういずかたへも出ねば、心が屈して悪いによって、きょうはどれへぞ、遊山に行こうと思うが何とあろうぞ。太郎冠者御意なくは申し上ぎょうと存ずるところに、これは一段とようござりましょう。主 さりながら、このあたりはおおかた見盡くいたによって、きょうはどれへぞ、珍しい所へ行きたいものじゃ。

太郎冠者 まことにこのあたりは、おおかた御見物なされましたによって、今日はどれへぞ珍しい所へ、お供致したいものでござる。主 汝分別をしてみよ。太郎冠者 畏ってござる。どこもとがようござりましょうぞ。主 どこもとがよかろうぞ。太郎冠者 イヤ、西の宮へお供致しましょう。主 その西の宮という所は景のよい所か。太郎冠者 つつと面白い所でござる。主 それならばおっつけて行こう。太郎冠者 ようござりましょう。主 汝は供をせい。太郎冠者 心得ました。

主 サアサア来い来い。太郎冠者 参ります参ります。主 さてその西の宮という所は、景のよい所か。太郎冠者 浦山をかけてござれば、浦で網を引かせらりょうと、山で狩をなさりょうと、おぼしめすまの所でござる。主 それは一段の所じゃ。イヤ、来るほどに、大きな川へ出た。これは何という川じゃ。太郎冠者 こなたはこの川を御存じござらぬか。主 イイヤ何とも知らぬ。太郎冠者 これは神崎の渡しと申して、かくれもない大河でござる。主 ハハア神崎の渡しというのはこの川のことか。太郎冠者 さようござる。主 して乗る物でもあるか、ただし 勝ち渡りか。太郎冠者 いつもこのあたりに乗る物がござる。行て見て参りましょう。主 早う見て来い。太郎冠者 畏ってござる。

太郎冠者 いつもこのあたりに、乗る物があるが、きょうは何として見えぬことじゃ知らぬ。イヤ、つつと向こうに見ゆる。急いで呼ぼう。ホーイ、ホーイ、ふなやい。ホーイ、ふなやい。ホーイ。主 ヤ

イヤイ太郎冠者。ふなと言うては来ぬほどに、ふねと言うて呼べ。太郎冠者こなたの御存じないこと
でござる。私にまかせておかせられい。主これはいかなこと。太郎冠者ホーイ、ふなやい。ホーイ、ふな
やい。ホーイ。主ヤイヤイ、ヤイ太郎冠者。太郎冠者何事なにごとでござる。主ふなと言うては来ぬほどに、ふ
ねと言うて呼べと言うに。太郎冠者私の前ではようござるが、おのおの前こかでそのようなことを仰せら
れたならば、恥をかかせらりよう。主何と恥をかこうとは。太郎冠者古歌にもふなとこそござれ、ふね
とはござりますまい。主推参すいさんな。汝が分ぶんとして古歌だてを言いおる。さりながら古歌にあらば詠め。
太郎冠者畏ってござる。「ふな出して、跡はいつしか遠ざかる、須磨の上野すまうえのに秋風ぞ吹く」。何とふなで
はござらぬか。主それはさだめてふねでかなあろう。太郎冠者こなたの分ぶんとして、この古歌を直させら
ることは成りますまい。主それならば某が方には、ふねと詠うだ古歌がある。太郎冠者あらば早う詠
ませられい。主心得た。「ほのぼのと、明石の浦の朝霧あかしあさぎりに、島がくれゆくふねをしぞ思う」。何とふね
ではないか。太郎冠者それはさだめてふなでかなござりましょう。主汝が分ぶんとして古歌を直すことは成
るまい。太郎冠者私の方にはまだござる。主あらば早う詠め。太郎冠者畏ってござる。「ふな人は、誰を戀
うとか大島の、浦かなしげに聲きこの聞うる」。何とふなではござらぬか。主それもさだめてふねでかな
あろう。太郎冠者こなたの分ぶんとして、古歌を直させらることは成りますまい。主某が方にはまだある。
太郎冠者あらば詠ませられい。主さりながら、今度はちと早う詠まねばならぬ。太郎冠者早うなりと遅う
なりと詠ませられい。主心得た。「ほのぼのと明石の浦の朝霧あかしあさぎりに島がくれゆくふねをしぞ思う」。何と
ふねではないか。太郎冠者さては、こなたのこととござる。主何とこなたのこととは。太郎冠者「褻けにも晴
れにも歌一首」と申すが、それは最前の歌さいぜんでござる。主最前さいぜんのと歌は一つなれども、最前さいぜんのは人丸の
歌、今のは猿丸大夫の早歌さるまるだゆうはやうたというて、作者が違ちがうてあるいやい。太郎冠者いかに作者が違ちがうても、歌は
一つでござる。それまでもないこと。あなたの着き場つばと、こなたの着き場は何と申す。主それはふふ、
ふね着きよ。太郎冠者ふな着きとこそござれ、ふね着きとはござりますまい。その上私の方にはまだご
ざる。主あらば早う詠め。太郎冠者心得ました。「ふなきおう、堀江の川きいのみなぎわに、來居つつ鳴くは
都鳥かも」。何とふなではござらぬか。主まずそれに待て。太郎冠者畏ってござる。

主これはいかなこと。太郎冠者といらざる古歌穿鑿こかせんさくを致いたしてほうど詰まった。

何と致そう。イヤ、謠うたいで詰みようと存ずる。

主ヤイヤイ太郎冠者。某が方には、ふねと謠う謠があるが、汝が方にもあるか。太郎冠者こなたの方
にござれば、私の方にもござる。あらば早う謠わせられい。主心得た。甜山田矢走やまたやばせの渡し舟わたふねの、夜は通
う人なくとも、

太郎冠者イヤ、一段のことを謠い出だされた。あとで詰みようと存ずる。

主甜月の誘わばおのずから、ふねもこがれて出ずらん、ふ。太郎冠者のう主殿しゅうどの。主何と。太郎冠者甜ふな人びと
もこがれ出ずらん。主なんでもないこと、しさりおれ。太郎冠者ハアー。

主エーイ。太郎冠者ハアー。〔大系本一四七頁〕

日本語の和語を学習するとき、こんなことに疑問を抱き考えていくのに良い題材として紹介したい
と思います。水の上を人が渡る手段として用いる物の名ですが、漢字で書きますと「舟」と「船・舩」
と書き分けます。漢語では「舟船」と熟語して、訓みは「シュウセン」と呼称します。この訓みは聴
き慣れないかもしれませんが、小学館『日本国語大辞典』第二版を繙きますと、ちゃんと収載されて
いる言葉です。日本の文献資料の用例としては、『明衡往来』(一一世紀中頃)下末に、「具表=微志、
而舟船遅來、自以懈怠」。『海道記』(一二二三年頃)竹の下より逆川「棹哥數聲、舟船を名月峡の口
によせ松琴万曲琵琶を尋陽江の汀にきく」。『日葡辞書』(一六〇三-〇四年)「Xu<xen(シュウセン)。

フネフネ』。『星巖集』-乙集(一八三七年)西征集四・普賢洋遇大風「怒濤屹立天中央、奪-我舟船-当-箕箒-」。『西京繁昌記』(一八七七年)<増山守正>初・上「人物舟船動揺の状態を觀望せしむる者、又一層の妙工美觀といふべし」とし、さらには中国漢籍『後漢書』-袁紹傳「益作-舟船-、繕-修器械-」を引用しています。

次に、和語の読み方を見ますに、上記狂言題目にありますように「ふね」と「ふな」の両用の読み方があることに気づかされます。そこで、疑問です。どのような場合に「ふね」と云い、どのような場合に「ふな」と日本語では表現しているのでしょうか？

現代人は、船舶を利用して「船旅」をしたり、内海をクルージングして「船遊び」することが余りなくなっています。また、川を渡るとき、渡し場から「渡し船」に乗りました。長く乗っていると、「車酔い」ではなく「船酔い」に出遭います。「船部屋」で横になるか「船縁」に出るか、波に揺られて「波乗り船」には逆らえません。時には「船荷」を積載してますから、「荷船」は荷の上げ下ろしにてんやわんやします。大きいも小さいも「造り船」は、「船大工」が造ります。材料は木材であれば、「木船・木舟」と呼び、石材であれば、「岩舟・岩船・磐船」と呼び、鉄材であれば「黒船」「鉄船」と呼びます。これを動かす人を「船乗り」「舟守」「船方」と、この束ね役が「船長」で日録をすれば「船長日記」、これを役人が管理して「船奉行」「船賃」を支払うお客は「船人」です。彼らが使う道具の総称を「船具」と字音読みし、「船道具」類に「船舵」「船梯子」「船碇」「船筏」「船時計」等々。見るとおわかりでしょうか。「船」の語字が前にあって次に繋がる語字があるときは、「ふな」と読んでいます。逆に、前に修飾する語字があれば「ふね」と読んでいます。ここまでは、ますます順調でしたが、地名には曲者が潜んでいます。神奈川県に「大船」と書いて「大船」と読む地名があります。東海道線の駅名「大船駅」にもなっています。岩手県の南端にある「大船渡」のように「渡」の語字があれば良いのでしょうか…。脱落・省略語のある地名なののでしょうか。他は京都の地名「貴船」、人の苗字にも「三船」「入船」。正月には寝枕にはさむ「宝船」のお札のように「ふね」であるのにです。「大船」は、別の「ふな」という字語、例えば「鮒」(魚名)の宛字かとも考えたくもなります。

末尾が「な」であったり、「ね」であったりする語を検索するとき、各種の『逆引き辞典』を利用なすると便利です。因みに、ひとつ手元にある大修館『日本語逆引き辞典』で、この「ね」と「な」の語を眺めてみますに、「な」は、「ふな【鮒】」の語彙しか見えていません。これとは逆に「ね」は「ふね【船】」の語彙数十例が見えています。次に一部列挙しておきましょう。

のりあいふね【乗合船】うかいふね【鵜飼舟】トカイふね【渡海船】もやいふね【舫い船】かよいふね【通い船】ショウリョウふね【精霊舟】トウロウふね【灯籠舟】おぶね【小舟】おおぶね【大船】うつおぶね【空舟】さかぶね【酒槽】べかぶね【べか舟】うきふね【浮舟】かきぶね【牡蠣船】つなぎぶね【繋ぎ舟】ひきふね【引き舟】まるきぶね【丸木舟】……かがりふね【篙舟】もかりふね【藻刈り舟】くりふね【割り船】おしおくりふね【押し送り船】いさりふね【漁船】にたりふね【荷足船】つりふね【釣船】くろぶね【黒船】かわぶね【川船】ごしゅいんぶね【御朱印船】
といった語彙がそれです。

次に応用に移ります。日本の地名や姓名には、不可解な読み方をすることばがいくつかあります。

一 姓名における和語と漢語

- A 「ね(ne)」と「な(na)」 非変化語「あね【姉】」「みね【峰・峯】」
【米】米虫・米石「よね」と「よな」
【舟】「ふね」と「ふな」船藤(センドウ)・船藤(ふなトウ)。

【稻】「いね」と「いな」

【金】金親・金原・金作・金持・金集(つた)・金棒。「かね」と「かな」

金城(かなしろ)・金城(かねき)キンジョウ、金田一(きんだいち)・**金**田一(かねだいち)、金重(かなうけ)・金重(かねしげ)、金讃(かなささ)・金讃(かねさん)、

【胸】胸形・胸像。「むね」と「むな」

【宗】宗岳(おか)ソウガ・宗像・宗象・宗形・宗方。「むね」と「むな」

【棟】棟居。「むね」と「むな」

【棟】棟。「みね」と「むな」

B 「め(me)」と「ま(ma)」

【雨】雨宮。「あめ」と「あま」

C 「ゑ(we)」と「wa」

【聲】「こえ」と「こわ」

D 「ぜ(ze)」と「ざ(za)」

【風】風神・風吉(きり)。「かぜ」と「かざ」

風袋(フウタイ)・風袋(かざぶくろ)

E 「け(ke)」と「か(ka)」

【酒】酒。「さけ」と「さか」【竹】「たけ」と「たか」

【水】「みづ」と「みな」

その他《補助資料》武庫川女子大学西崎亨先生から以下の字音項目の事例を戴きました。感謝!!

漱石の小説に『三四郎』は「サン」なのに、さぶちゃんこと「北島三郎」はなぜ「三郎」か？。

「sam」と「sab」字音相通語にあり、もともとは「samro」が「sabro」となった経緯を見ることが可能である。

「伊^い干^{かん}我」〔音の万葉仮名〕 兵庫「^い鷗^{かるが}寺」出土木簡遺跡。

地名・人名には、「n」音をラ行音で表記する用例が見える。

1 「信^し楽^ら」は元の字音は、「シンラク」であり、「しならき」「しにらき」と発音していたのではなかろうか？

2 「敦^つ賀^{るが}」も字音読みは「トンガ」であり、漢和辞書『大字典』で「敦」の文字を繙くと、漢音呉音ともに「トン」他に「タイ/テ」「タン/ダン」「テウ」「タイ」「タウ/ダウ」「チウ/チユ」「トン/ドン」「シユン」の音が掲載されている。ここで「ツンガ」を「つるが」と表記したとすれば、この字音に「ツン」の字音があったことになる。

3 「播^は磨^{りま}」は、字音読み「ハンマ」であり、これが「ハリマ」となる。

4

「男^な信^{ましな}」〔長野県地名〕は字音「ナンシン(namshin)」ワープロソフトで「なましな」と入力し、これを漢字に変換を試みるに変換されない。でも、「平^へ郡^{ぐり}」〔奈良県地名〕は変換されて出力できる。